

小林孝嘉氏(高14回)電気通信大特任教授 日本化学会賞受賞



ドイツ連邦共和国 フンボルト賞も

現在電気通信大学の特任教授(先端超高速レーザー研究センター長。市内東本町の出身。受賞タイトルは、「超高速分光法の開発と極短寿命種・遷移状態の測定による化学反応過程」。同賞は、化学の基礎または応用に関する貴重な研究をなした。)

電気通信大特任教授の小林孝嘉氏(高14回)が、日本化学会から第六十四回日本化学賞を授与された。

小林氏は柏崎高校第14回の卒業で、東大理学部卒。同大理学系博士課程修了。東大教授を経て、



退任のあいさつ

前校長 浅野 隆

このたびは定年により県立柏崎高校を最後に退職することになりました。

最後の三年間を柏崎高校で勤務でき同窓会の皆様から多大なるご理解と協力、さらには温かいご指導や激励をいただいたことに心から感謝申し上げます。

柏高は知・徳・体および知・情・意のバランスのとれた全人教育を行い、真の教養人を育てるため丁寧で質の高い授業、充実した部活動・行事、親身の生徒指導の三つを柱

よって後世に残る重要な業績を挙げ、今後も学問の最先端で活躍されることが期待される国際的に著名な研究者に授与されるもの。日本からは、これまでノーベル物理学賞受賞者である小柴昌俊氏や、元東大総長有馬朗人氏などが受賞している。

北原さんに瑞宝重光章 教育研究功労で

筑波大学学長などを務めた北原保雄さん(高7回)が春の叙勲で瑞宝重光章を受章した。授与式は五月八日に皇居で行われた。

北原さんは東京教育大S日事業を核に学校全体で学習意欲の向上と学力の醸成をはかり生徒の進路希望の達成を図ることはもちろん、プライドと自信をもった生徒の育成に努め活力のある学校にしてまいりました。

豊富な資質能力に恵まれた柏高生及び生徒の進路希望実現のため多忙感と闘いながら学校運営のため骨身を削って仕事をこまめに勤めることができたものと思っております。

柏高に心から感謝すると共にこれからも柏高のますますの隆盛を祈念し、離任のあいさついたします。長い間本当にありがとうございました。

柏高に心から感謝すると共にこれからも柏高のますますの隆盛を祈念し、離任のあいさついたします。長い間本当にありがとうございました。

カメラと書籍の寄贈 駒形紀男氏(高21回)より

駒形紀男氏(高21回)は、このほど長年勤務した出版社を定年退職された。編集という仕事に携わってこれた関係で一眼レフカメラフィルム式を語分科会会長)も歴任。長年にわたる教育研究功労が認められての受章となった。

明鏡国語辞典など日本語に関する単著や監修した著書は多数。「問題な日本語(大修館書店)は七十万部を超える大ベストセラーになった。

北原さんは今回の受章について「身に余る賞をいただき喜んでおります。賞に恥じないよう、これからもさらに研鑽を積んで参りたいと思います。故郷、柏崎のことはいつも気に掛けており、これからは少し柏崎のお役に立ちたいと思っております」と語っている。



近藤(東京柏会)会長に 瑞宝中綬章

東京柏会の近藤健彦会長(高12回)が昨秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章した。

近藤会長は京都大を卒業して一九六五年に大蔵省(当時)に入省。国際



数台持っておられたが、デジタルカメラ時代になり最近では使用していません。写真撮影というものを



知る上でフィルム式カメラに精通するとはプラスになる。考え、母校の写真部等に利用していただけるなら、と母校に寄贈された。

杉原さん新潮感動大賞

第四回「新潮文庫感動大賞」に全国九二五〇通の応募の中から、柏高二年生の杉原真衣さんの作品「十七歳」が選ばれた。読み手が何を感ずたのかを書く読書エッセーのコンテスト。杉原さんは芥川賞作家・小川洋子さんの「博士の愛した数式」を読んで、自分の年齢でもある17という数字に親愛の

叙勲はこうした国際金融のエキスパートとしての活躍が認められた。著書に「プラザ合意の研究」「小説プラザ合意」「アジア共通通貨戦略」など多数。

退官後は浜松学院大学長や明星大教授などを経て、今春から淑徳大学大学院の客員教授になった。

「やまじゅん」の愛称で親しまれていた高8回卒の山田順太郎氏は、昨年五月九日楽しましにしていたはずの柏崎第一中学のクラス会前日亡くなった。死因は癌であったが「死後一ヶ月は誰にも知らせるな」と言い残していた。そして中学時代からの親友の医師にも癌のことは語らず、気丈に振舞い、遺産の処理や納骨の手配は一人で済ませていた。その彼が、母校・柏崎高校の生徒諸君に使って欲しい。独身を貫き母親を亡くしてから四十歳で退職。自宅に三二階を建て、数台置いて、IT時代の先駆けの生活に入った。持ち前の能力を發揮し、大いに成果を挙げたという。

故山田順太郎氏(高8回)が2000万円遺贈
前同窓会会長 勝海 昭(高8回)

膨大な資料と古文書や家伝を丹念にたどり、各地を訪れ関係者から聞き取りを重ね、まとめ上げた力作です。米山検校は著者の徳間氏から数えて六代前の山上徳右衛門理

「江戸時代の中期に柏崎の北条長島村から江戸に出て検校位に就き、江戸有数の分限者になった米山検校の初めての評伝です。彼は「貧窮盲人」のため自費で盲人ののための

学校の作つたり、北条一帯の飢饉を繰り返し救いました。しかし、誤伝に紛れてその事績が埋もれてしまったので、史料にあたって可能な限り正確な伝記を心がけました。(作者記)

と、諸般の事情を考慮し同窓会に約二千万円を遺贈するという遺言状をたたためていた。

慶応大学卒業後、エスビー食品に入社、企画開発部にいた間、中国語をマスターし、大手商社(トーマン)に転職。社内では逸話も多し。中国語は中国人が驚くほど堪能で解放前の中国駐在員を約十年間勤めた。商社の仕事ももちろん、趣味の中国多才にして人懐っこい笑顔の「やまじゅん君」の幸福をあらためて祈りたい。

「海舟は晩年の一時期、自分のルーツを探索しようとしたのだ」と直感したのだそう。徳間氏は明治大学を卒業後、埼玉県立浦和高校に勤務。現在は駒澤大で中国語を教えています。

「海舟は晩年の一時期、自分のルーツを探索しようとしたのだ」と直感したのだそう。徳間氏は明治大学を卒業後、埼玉県立浦和高校に勤務。現在は駒澤大で中国語を教えています。